キャバレーとシャンソン

―「シャ・ノワール」を中心にして―

吉田　正明

1881年，ロドルフ・サリス Rodollphe Salis (1852-97)[1]とエミール・グドー Emile Goudeau (1849-1906)[2]によってモンマルトルのロシュシュアール通り84番地に開かれたキャバレー「シャ・ノワール」[3]では，詩人や芸術家たちによる才気の饗宴が繰り広げられ，連日多くの客たちで賑わった。「シャ・ノワール」はこうしたボヘミアン詩人や芸術家たちのパフォーマンスを売りにして客たちを呼び込んだ最初の文芸キャバレーであり，1885年にラヴァル通り12番地（後にヴィクトール・マッセ通りに改称）に移転後[4]，1897年設立者サリスの死によってその幕を閉じるまで[5]，そのメンバーを微妙に変えながらも15年間に亘り様々な文芸の交流の場となり，ハイブリッドで前衛的な文化芸術の拠点となり発信地ともなったのである。

文芸キャバレー「シャ・ノワール」には様々な詩人や画家が集っただけでなく，多くのシャンソニエたちも集い，サリスが開店当初当局の許可なく不法に置いたピアノ伴奏で多くのシャンソンが歌われた[6]。ロシュシュアール通りに開店した第1期「シャ・ノワール」からヴィクトール・マッセ通りに移転した第2期「シャ・ノワール」にかけて，シャルル・ド・シヴリーCharles de Sivry (1848-1900)[7]，アルベール・タンシャン Albert Tinchant (1860-92)[8]，マリー・クリジンスカ Marie Krysinska (1857-1908)[9]，ジョルジュ・フラジュロール Georges Fragerolle (1855-1920)[10]，クロード・ドビュッシーClaude Debussy (1862-1918)，エリック・サティ Erik Satie (1866-1925)といった音楽家や作曲

家がそこでピアノ伴奏を務めた。

「シャ・ノワール」では様々なシャンソンが歌われたが，それらの歌には世紀末のシャンソンのあらゆる特徴や影響が見られ，その豊かさはそこに関わったおよそ100人あまりの詩人や音楽家やシャンソニエたちの賜物に他ならない。そこではしばしば詩や詩の一節に曲付けされたシャンソンが披露された。特に好んで取り上げられたのは，テオドール・ド・バンヴィル，フランソワ・コペー，エミール・グドー，ポール・ヴェルレーヌ，ジャン・リシュパンなどの詩人であった。中には，マルセル・ルゲ Marcel Legay (1851-1915)[11]のようにモーパッサンやユゴーやルイーズ・ミッシェルなどの散文に曲付けして歌ったシャンソニエもいた。

「シャ・ノワール」で歌われたシャンソンは，しばしば皮肉や冗談や風刺を利かした，詩と音楽が見事に調和した良質な歌であった。そこではシャンソニエ chansonnier という言葉が，まさに，ベランジェの時代のように歌謡詩人という意味合いで用いられ，それが抒情的であれ感傷的であれ社会的であれ，作者は自作のシャンソンを自ら歌い，中には詩集を出版したものも少なからずいた。キャバレーのシャンソニエは，カフェ・コンセールの歌手と違い煌びやかな舞台衣装も装飾も身につけず，カフェ・コンセールのようにいずれかの歌謡スタイル（奇想歌手 fantaisiste，滑稽歌手 comique loufoque，伊達歌手 gommeux，激動歌手 gambillard 等）にカテゴライズされることもなかった。

まさしくベランジェやドゥブローやデゾジエなど 19 世紀前半に活躍した歌謡作家の流れを汲むキャバレーの歌が豊かに花開いたのが，酒を飲みながらシャンソンを味わうために集った趣味人たちの特権的な溜まり場となった文芸キャバレー「シャ・ノワール」に他ならなかった。そこに集った詩人やシャンソニエは，舞台やオーケストラのない手狭な場所で，唯一置かれていたピアノに代わる代わる肘をつきながら自作の作品を歌った。中にはモーリス・ロリナ Maurice Rollinat (1846-1903)[12]のように，聴衆に背を向け自らピアノ伴奏をし

ながら歌った詩人もいた。そしてサリスは，香具師の興業もかくやと見紛う持ち前の話芸とパフォーマンスで，「皆さん，これから有名な詩人がモンマルトルの洞窟のニンフによって編まれた冠を授けられた詩編の一つをお聞かせします[13]。」などと一くさり口上をぶって歌い手を紹介したりした。

「シャ・ノワール」で歌われたシャンソンは，貧窮や売春といった社会的・時事的問題を扱うにせよ，愛や子供やクリスマス，あるいは地方の風俗や伝統といった題材を扱うにせよ，いずれもポピュラーなテーマが多かった。サリスとともに「シャ・ノワール」を盛り上げたエミール・グドーは，かつて「イドロパット・クラブ」で行っていたようなカルチエラタンの学生たちの陽気な斉唱の伝統を店に持ち込んで，自ら音頭を取り馴染みの歌のルフランを客たちと一緒に歌い人気を博した。古謡もしばしば口ずさまれ，「ブロンド娘のそばで」*Auprès de ma Blonde*や「ブドウ酒の木」*La Vigne au vin*などのよく知られたシャンソンが客たちとともに斉唱されたりもした。モーリス・ロリナによって紹介されたベリー地方の民謡「車引きの女房」*La femme du Roulier*はとりわけ成功を収めた曲である。

哀れな女	La Pauvre femme
それは車引きの女房	C'est la femme du roulier
津々浦々を経巡り	S'en va dans tout l' pays
旅籠から旅籠へと	Et d'auberge en auberge
良人を探し回る	Pour chercher son mari
ティルリ	Tireli
ランプとともに	Avec une lanterne...[14]

時事問題を好んで取り上げたのは，第1期「シャ・ノワール」においてはジュール・ジュイ Jules Jouy (1855-97)[15]，モーリス・マック＝ナブ Maurice

Mac-Nab (1856-89)[16]が，第 2 期ではジャック・フェルニ Jacques Ferny (1863-1936)[17]，ニュマ・ブレス Numa Blès (1871-1917)[18]，そして「シャ・ノワール」ではエリック・サティのピアノ伴奏で歌ったヴァンサン・イスパ Vincent Hyspa (1865-1938)[19]などが挙げられる。パナマ事件[20]など政治的スキャンダルや，勲章の密売など当時の風俗への風刺もしばしば歌われた。

ジャック・フェルニは，一流の仕立屋に作らせたモーニングに身を包み，眼鏡の奥に鋭い視線を光らせ，口ひげを丹念に整えたいで立ちで，ボヘミアンというよりは教授然とした風情で，皮肉と機知に富んだ「普通選挙」*Le Suffrage universel*や以下に抜粋する「大統領の訪問」*La Visite présidentielle*などを歌った。

知事を頂いた街が	Quand un' ville orné' d'un préfet
共和国大統領を迎える時	R'çoit l' Président d' la République,
知事は駅で大統領に	A la gar' ce préfet lui fait
素晴らしい歓迎を行う	Avoir un accueil magnifique ;
大統領は立憲的な慎みをもって	Et l' Président dit avec la
次のように述べた：	Réserve constitutionnelle :
≪かような盛大なる歓迎に感謝	≪Merci beaucouop de tant d'éclat,
我に感謝，パリの街に感謝≫	Merci pour moi, merci pour elle.≫
実際おのおの方，いったい誰が	En effet, Messieurs, qui c'est-i'
首都を視察に来られたかご存知か？	Qui vient voir votre capitale
それは共和国政府の	C'est le gardien de la Constitution
番人でござる。	gouvernemental.[21]

また，ヴァンサン・イスパが，「ポケットに手を突っ込み，半ば目を閉じ，午睡する猫のような悪賢そうな表情で[22]」，マック＝ナブにも相通ずるブラック

ユーモアを利かしたモノローグ「孤独なミミズ」*Le ver solitaire* を朗読すると，観客は一斉に喝采を送った。

僕は恋の病にこと切れよう，	Je finirai, dernière peine de cœur,
恋煩いと診断されて。	Sous ce diagnostic : maladie de langueur.
そして母の接吻も知らない僕は，	Et sans avoir connu les baisers de ma mère,
哀れで孤独なミミズにすぎない	Je suis le ver, le pauvre ver solitaire.[23]

ジャック・フェルニ，ニュマ・ブレス，ヴァンサン・イスパなどは，教会や共和国政府を度々シャンソンで風刺した。

モーリス・マック＝ナブは，グドー率いた「イドロパット・クラブ」においてはそれほど好評を博さなかったが，「シャ・ノワール」でようやく頭角を現し認められるようになったシャンソニエである。彼の得意としたのは，ブラックユーモアを利かせ冷ややかな皮肉を盛り込んだ歌である。彼は話す時にどもる癖があった上，痩せていて背が高く，髭をたくわえ鼻眼鏡をかけ，嗄れ声をしていてあまり風采のあがらない男だったが，それでも現代シャンソニエの父と呼ばれた存在だった。彼は「シャ・ノワール」で物悲しげな様子をし，単調な歌い方で歌ったが，とりわけ労働者の権利要求を取り上げた「メトロポリタン大集会」*Le grand métingue du métropolitain*[24]や，優しい娘との結婚を拒まれた失意の若い男がサン＝ジェルマンの森で首吊り自殺をしたことを物語る「首吊り男」*Le pendu*[25]などが彼の作品ではよく知られている。また以下にその抜粋を引用する，透明な鉢の中にアルコール浸けにされた胎児たちを歌う，グロテスクでブラックユーモアを利かした「胎児たち」*Les fœtus* も人口に膾炙した有名なシャンソンである。

小さいのや大きいのが，	On en voit de petits, de grands,

似たのや違ったのが見える,	De semblables, de différents,
透明な鉢の底に。	Au fond des bocaux transparents.
あるものは優しい顔で；	Les uns ont des figures douces ;
穏やかに誕生し,	Venus au monde sans secousses,
腹の上に親指を結んでいる。	Sur leur ventre ils joignent les pouces.
別の胎児は両目を上に,	D'autres lèvent les yeux en l'air,
誇らしげな眼差しを向けている	Avec un regard assez fier
はっきり見えない人のために。	Pour des gens qui n'y voient pas clair !
また別の胎児は裂けた姿で,	D'autres, enfin, fendu en tierce,
ひっくり返されるのを恐れているかのよう	Semblent craindre qu'on ne renverse
彼らを揺するアルコールの海を。	L'océan d'alcool qui les berce.
（中略）	(・・・)
恐らくおまえたちだけが知っていよう,	Et vous seuls vous savez, peut-être,
それが至福かどうかを	Si c'est le suprême bien-être
生まれる前に死ぬことが！	Que d'être mort avant de naître!...[26]

しかし時代は不況で，シャンソニエの仕事は厳しく，サリスも金払いが悪く「シャ・ノワール」に出演してもほとんど収入にならず，また彼自身の主義から歌では金を受け取らず，代わりに酒で支払ってもらうという無理な生活がたたり，マック＝ナブは病に倒れ，1889年のクリスマスの日に33歳の若さで他界する。

モーリス・ロリナは1880年にいち早くボードレールの詩に音楽を付けて歌ったシャンソニエであったが，自らもその影響を受けて陰鬱な詩や歌を多く創作した。彼は自らピアノを弾きながらボードレールや自作の曲を歌った。彼の歌はその音楽性と文学性において人々を魅了し，詩人としても高く評価され，ジョルジュ・サンド，バルベー・ドールヴィイー，あるいはヴィクトル・ユゴ

ー[27]など当時一流の作家から讃辞を送られている。また彼は，グノーに「天才的な狂人だ！」と評され，マスネに「彼を私の弟子にしたい！」とまで言わせしめた情熱的で型破りな作曲家でもあった。仲間や批評家たちからも称賛され，サラ・ベルナールのサロンの寵児でもあった彼（彼女からアメリカ公演旅行の同伴を請われたほどである）は，「シャ・ノワール」で自らのピアノ伴奏とともに甘美な歌から滑稽な歌まで，悲愴感漂う感動的な作品やブラックユーモアを利かした風刺作品など，様々な調子の歌を披露し喝采を浴びた。

以下にその抜粋を引用するヴェルレーヌの向こうを張った彼の「秋の歌」*Chanson d'automne*は，1879年にまず「イドロパット・クラブ」で創唱された後「シャ・ノワール」でも歌われた曲であるが，その彼独特の暗鬱な抒情や繊細なメロディーを通してロリナならではの詩情が窺える傑作である。

木々は発育を妨げられ，	Les arbres se sont rabougris,
農家は扉を閉ざし，	La chaumière ferme sa porte,
灰色の小蝶は	Et le petit papillon gris
枯葉に場を譲る；	A fait place à la feuille morte ;
池の睡蓮は枯れ，	Plus de nénuphars sur l'étang,
草は萎れ，虫は喘ぐ，	L'herbe languit, l'insecte râle,
そして燕は，すすり泣き，	Et l'hirondelle, en sanglotant,
蒼白な地平線に消えていく。	Disparaît à l'horizon pâle.
（ルフラン）	(*au refrain*)
美しい日をなおも摘みに行こう，	Viens cueillir encor un beau jour,
打ち拉ぐ天候にも拘わらず，	En dépit du temps qui nous brise,
そして僕たちの愛の別れを	Et mêlons nos adieux d'amour
そよ風の最後の香と混ぜ合わそう。	Aux derniers parfums de la brise.[28]

しかしなんといってもロリナの真骨頂は，死をテーマにした陰鬱なシャンソンに他ならない。彼のCD歌集「死が彼をあざ笑う」*La Mort Lui Ricane*[29]には，「旅への誘い」*L'invitation au voyage*や「月の悲しみ」*Tristesse de la lune*などのボードレールの詩に付曲した作品の他，「骸骨譲」*Mademoiselle Squelette*,「葬列」*Le convoi funèbre*,「スミレの咲く墓地」*Le cimetière aux violettes*,「死の聖母」*Notre Dame de la mort*といった暗鬱なシャンソンが多く収録されている。

またキャバレーが発行していた週刊紙『ル・シャ・ノワール』第45号（1882年11月18日）には，ユゼスUzèsによる彼のデッサンが掲載されているが，ぼさぼさの髪に口髭を生やしたロリナの胸像の横で，墓掘り人夫とおぼしき骸骨がスコップを片手に彼の肩に親しげに手をかけている様子が描かれており，死を歌う歌謡詩人chansonnier macabreとしての彼の特徴をよく表している。細部にはその他，カエルやトンボや小鳥などの動植物に交じって，葬列や日没へと向かう骸骨の踊りdanse macabre，あるいはカラスが飛び交う陰気なゴシックの古城といった背景が描かれ不吉さを助長している。また骸骨の手には摘み取られた一輪のバラが握られており，人生の儚さを象徴している。

このようにパリのキャバレーやサロンで人々を虜にしもてはやされたロリナではあったが，彼は1883年から没する1903年まで，パリの喧騒を逃れ，晩年の20年間をフランス中西部クルーズ県にある小さな村Fresselinesで隠棲することとなる。

キャバレーでは日常生活を題材にした身近な歌も多く取り上げられた。レオン・クサンロフLéon Xanrof (1867-1953)[30]は社会の悪弊や欠点を辛辣な揶揄や嘲笑によって風刺した。彼はまたかつて自分が経験したカルチエラタンでの学生時代のボヘミアン生活を皮肉った「3番地のホテル」*Hôtel du nº 3*や「学生のロンドー」*Le Rondeau des Etudiants*といった曲も残している。

「シャ・ノワール」の歌のレパートリーの中であまり知られていないのが郷

土愛を歌ったシャンソンである。各地から上京して来た歌手たちが，郷愁を込めて故郷の風習や過酷な現実を切々と歌い聴衆を感動させた。ブルターニュの民族衣装をまとって歌ったテオドール・ボトレル Théodore Botrel (1868-1925)[31]はピエール・ロチの『氷島の漁夫』*Pêcheur d'Islande* にインスパイアされて作った名曲「パンポルの女」*La Paimpolaise* を歌い人々に深い感銘を与えた。

大波が彼を標的にし，	Puis, quand la Vague le désigne,
怒号を挙げて彼を呼ぶと，	L'appelant de sa grosse voix,
勇敢なタラ漁師も観念し	Le brave Islandais se résigne
胸元で十字を切る。	En faisant un signe de croix...
その哀れな男は，	Et le pauvre gâs,
死が迫ると，	Quand vient le trépas,
握り締めたロケットに接吻し，	Serrant la médaille qu'il baise,
底なしのわだつみに沈んでいく	Glisse dans l'Océan sans fond
パンポルの女を想いながら	En songeant à la Paimpolaise
ブルターニュで彼の帰りを待つ！	Qui l'attend au pays breton!...[32]

ボトレルは「美しきイワシ漁師の妻たち」*Les Belles Sardinières* においても，夫を漁で亡くした妻たちが子供たちを養うこともできずに悲嘆に暮れる様を歌い，モンマルトルの聴衆に深い感動を与えた。彼の歌は概して義務や服従を説く道徳的な内容のものが多かった。

もちろんキャバレーでは，マルセル・ルゲの「なにも言わずに」*Sans rien dire* などのような愛の歌も多く歌われた。中でもロマンスで人々を魅了したのがポール・デルメ Paul Delmet (1862-1904)[33]である。彼は 1886 年に「シャ・ノワール」でデビューし，当初は「語り歌手」diseur として歌っていたが，や

がて他のシャンソニエの歌詞にもメロディーを作曲し提供するようになる。最初のロマンス「美しき五月」*Joli Mai*(1887)以来彼は次々に繊細で美しい旋律のロマンスを作り出し，とりわけモーリス・ヴォケール Maurice Vaucaire の詩に付曲した「小さな舗道」*Les Petits Pavés* や「小さな悲しみ」*Petit Chagrin* (1891)といった曲で成功を収めた。

デルメは 1889 年に彼の最も忠実な協力者となるモーリス・ブケ Maurice Boukay (1866-1931)[34]と出会い，彼の数十編の詩に音楽を付けることとなる。中でも最も有名なロマンスが，以下にその抜粋を引用する『マノン・レスコー』に着想を得て 1893 年に作られた「マノンへのスタンス」*Stances à Manon* である。

お前の大きな目の中の	Laisse-moi dans tes grands yeux
無限の空を味わわせてくれ	Goûter l'infini des cieux
そしてお前の魂の陶酔を	Et l'ivresse de ton âme...
お前の白い腕の中で	Laisse-moi dans tes bras blancs
僕の混乱した夢をあやしてくれ	Bercer mes rêves troublants
そして僕のうっとりとした欲望を	Et mon désir qui se pâme...
注げ，注げお前の接吻を	Verse, verse tes baisers
僕の癒されない感覚に	A mes sens inapaisés,
最後の一滴までも	Jusuqu'à la dernière goutte...
僕はお前の無情な心を愛す	J'aime ton cœur inhumain,
お前は明日僕を裏切るだろう	Tu me trahiras demain,
しかし今宵はお前すべてが僕のもの！	Mais ce soir, je t'aurai toute ![35]

ヴェルレーヌは『愛の歌』*Chansons d'Amour* の序において，ブルジョワの

支配する凡庸で味気なく恐ろしく陰鬱な時代にあって，デルメの歌はその甘美な歌声に苦悩する心が感知され，健やかで傾聴に値する曲であると称賛している[36]。

「シャ・ノワール」でただ一人の女流音楽家であると同時に詩人でもあったマリー・クリジンスカの名も逸するわけにはいかない。彼女は「シャ・ノワール」をはじめ，「イドロパット・クラブ」，「イルシュット」Hirsutes，「ジュモンフティスト」Jemenfoutistes，「ズュティスト」Zutistes など当時の文芸サークルに出入りし，ヴェルレーヌやシャルル・クロスの詩に音楽を付けて自らのピアノ伴奏で歌った。アンヌ・ド・ベルシーAnne de Bercy は，1908 年に亡くなった彼女について，その死の数日後にキャバレー新聞『キャト＝ザール』に次のように記している。

> 作曲者としてまさしく真の芸術家であった彼女は，個性的な調べのうっとりとするようなメロディーの数々を残してくれた。そこには音楽家としての才能の下に，常に女流詩人として理想への希求が見出された[37]。

シャンソニエの中で最も才能に恵まれ，最も多作であったのがジュール・ジュイ[38]である。彼は「イドロパット・クラブ」でデビューし，「シャ・ノワール」ではシャンソン酒場としての夜会を主導し，その他多くのキャバレーや文芸サークルにも関わりそこで歌った。彼は 19 世紀末のシャンソン界で重要な役割を果たした人物である。同業者たちからは「シャンソンで出来た男」la chanson faite homme と称され，仲間からは「ジュメ」Jumet の愛称で呼ばれていたジュイの思想の根底にはゆるぎない強固な共和主義精神があり，彼の作品の多くは社会と政治をテーマにしたものであった。彼は晩年のジュール・ヴァレスと共闘し，ブーランジスムには断固として反対し，その危機が続いた 4 年間に亘ってヴァレスの新聞『民衆の叫び』に日々時事的シャンソンや論説を

寄稿し続けた。その数は実に数百にものぼり，ある政治的事件が一人のシャンソニエによってこれほど根気強く執拗にシャンソン化されたことはそれまでフランス史上なかったことである。

しかしジュイのテクストを社会的・政治的シャンソンにのみ限定してしまうのは誤りである。彼はまたいくつかのレヴュー曲，カフェ・コンセールの歌，愛国的シャンソン，子供のためのはやし歌，滑稽歌，ロマンス，宣伝歌，あるいは彼が生涯憑りつかれていたギロチンの脅迫観念に由来する死をテーマとした歌など，その作品は実に多岐に渡っている。

また彼のシャンソンは，テレザ，ポラン，ポーリュス，イヴェット・ギルベール，フラグソン，フェリックス・ガリポ，シュルバック，カム・イル，アリスティッド・ブリュアンなど当時の人気スターをはじめ100名以上の歌手たちにカヴァーされ，〈エルドラド〉，〈スカラ〉，〈パヴィヨン・ド・ロルロージュ〉，〈ゲテ〉，〈バタクラン〉，〈アンバサダー〉，〈ユロペアン〉，〈エデン・コンセール〉，〈アルカザール・デテ〉といったパリの主要なカフェ・コンセールで歌われ人気を博した。

モーリス・ドネ Maurice Donnay (1859-1945)[39]は『シャ・ノワールを巡って』の中で，ジュイがシャンソン界にもたらしたものは，自然主義派が文学に，印象派が絵画にもたらした革新と同等であると述べ，ジュイと同時代に活躍したシャンソニエのジャック・フェルニは，彼は19世紀のシャンソン界の最高峰に君臨しており，ベランジェをも凌駕していると述べてジュイの功績を讃えている。しかし彼の現在の知名度は，ロートレックのポスターによって後世にも広く知られているアリスティッド・ブリュアンやイヴェット・ギルベールと比べると，それほど高いとは言えない。ジュイはまたブリュアンやギルベールなどと違って，その声がレコードに録音されることもなかった。彼がシャンソン界にもたらした功績からすると，再評価されて然るべきではなかろうか。

ジュイは40歳を迎える頃から精神を病み1895年に病院に入れられ，晩年は

脳梅毒に侵され 1897 年 3 月 17 日に 42 歳で狂死する。その 3 日後にはサリスの訃報が伝えられ，モンマルトルのシャンソニエたちは一時代の終わりを強く感じたという。

以上見てきたシャンソニエたちの活躍により，キャバレーで歌われたシャンソンは次第により多くの人々の興味を引くようになり，実際に店に足を運んでライブで彼らのパフォーマンスを見るだけでなく，印刷部数が数千部にも達した廉価な楽譜付歌詞（petit format や grand format）を買い求め，自宅でもそれを楽しむようになる。こうした「シャ・ノワール」の歌，あるいはモンマルトルの歌と呼ばれたシャンソンの普及によって，文芸キャバレーの知名度はますます高まった。

音楽出版社もこの流れに乗ってこぞってシャンソンの楽譜付歌詞を販売するようになる。ジョルジュ・オンデ Georges Ondet, ポール・デュポン Paul Dupont, オ・メネストレル Au Menestrel, エノック Enoch などである。それぞれの出版社は固有のスタイルを持ち，それぞれお気に入りの顧客を持っていた。音楽出版社は言うなれば，歌謡詩人と作曲家と挿絵画家との間の仲介者的役割を果たすことになる。ブリュアンだけは自らの経営するキャバレー「ミルリトン」において自費で楽譜付歌詞を作り販売した。

このように petit format や grand format の販売においては，作詞家と作曲家と挿絵画家とのコラボレーションが緊密に築き上げられることになる。例えば「慈雨」l'ondée bienfaisante と称されたオンデは，表紙を飾る石版画をアドルフ・ヴィレット Adolphe Willette，テオフィル・スタンラン Théophile Steinlen, カラン・ダッシュ Caran d'Ache, ジョルジュ・オリオル George Auriol といった「シャ・ノワール」にも深く関わった当時売れっ子の画家たちに描いてもらっているのである。

このようにシャンソンを通して様々な芸術の交流の場となり新たな文化芸術の発信地となった文芸キャバレー「シャ・ノワール」は，他の多くのキャバレ

ーのお手本となり，模倣されたり対抗されることとなる。中には自らのキャバレーを持ちそこで歌ったシャンソニエもいた。「ミルリトン」を作ったアリスティッド・ブリュアンは言わずもがな，「シアン・キ・フューム」Chien qui fume を開いたジュール・ジュイ，サン＝トノレ通り 251 番地にあった「ヌーヴォー・シルク」Nouveau Cirque の中 2 階にヴィクトール・ムズィーVictor Meusy (1856-1922)[40]とともにポール・デルメが開いた「ル・シアン・ノワール」Le Chien Noir などである。テオドール・ボトレルが *La Paimpolaise* を歌ったのも後者の店においてである。

またエミール・グドーはサリスと決裂した後，ジョルジュ・フラジュロールとともにロシュシュアール通り 108 番地に「シャ・ノワール」に対抗して「シャ・ボテ」Chat Botté をオープンさせる。1893 年には François Trombert が「キャト＝ザール」Quat'z'Arts を開き，「シャ・ノワール」の伝統を受け継いでいく。

かくして「シャ・ノワール」を中心に文芸シャンソンが豊かに華開き，モンマルトル精神といったものがそれを通して形成され，20 世紀のキャバレー文化にも大きな影響を及ぼしていくのである。

註

1) 非才な画家だった彼は，15 年間に亘り「シャ・ノワール」を経営したことで，「キャバレー貴族」gentilhomme cabaretier と称されその名を轟かせた。非凡な饒舌と即興とパロディーの才に恵まれていた彼は，巧みなパフォーマンスを交えた客寄せ口上 boniments の名手として知られ，スタンランのデッサン（*La chanson française*, Revue de la Bibliothèque nationale de France 16, 2004, p.39 参照） などにその様子が描かれている。彼はまたキャバレー経営者として抜け目のない実業家でもあった。

2) 彼は政府の役人を勤めながらも 1868 年に「イドロパット・クラブ」を結

成し，多くのフュミストやデカダン詩人やボヘミアン芸術家をカルチエラタンに集めた。サリスとの出会いが「シャ・ノワール」の栄光に決定的な役割を果たした。キャバレー発行の週刊紙『ル・シャ・ノワール』の初代編集長を務め，「イドロパット・クラブ」で行っていたような文芸の才気の饗宴を主導した。詩集に *Fleurs de bitume* (1878), *Poèmes ironiques* (1884), *Chanson de Paris et d'ailleurs* (1896), *Poèmes parisiens* (1897) があり，その大部分は *Poèmes à dire*, chez Ollendorff, 1898 に再録されている。彼はまた回想記 *Dix ans de bohème* (1888)を残しており，当時を知る貴重な証言となっている。

3) 店の開店日について鹿島茂氏は 1881 年暮れの 12 月 30 日と推定しているが（『モンマルトル風俗事典』白水社，p.141），Jean-Paul Caracalla は 1881 年 12 月 15 日としている（*Montmartre, Gens et Légendes*, Bordas, 1995, p.11）。エミール・グドーの回想もこの日付と一致する。

4) ラヴァル通りへの移転については 1885 年 4 月 25 日の週刊紙『ル・シャ・ノワール』に移転の予告が掲載される。当初は 5 月 29 日に移転する予定であったが，実際に店の引っ越しがなされたのは同年 6 月 10 日の深夜から 11 日の早朝にかけてであった。5 月 30 日の『ル・シャ・ノワール』のサリスの記事によると，ヴィクトル・ユゴーの死去にともない大詩人への弔意を表するために移転日を延期したことが述べられている。実際，「シャ・ノワール」の弔問団はユゴーの葬儀のお通夜に参列している。

5) キャバレー「シャ・ノワール」はサリスの死去により，「祝祭の間」で影絵劇の最後の上演を行った後，1897 年に閉店する。

6) Jean-Didier Wagneur, ≪Dieu a créé le Monde, Napoléon a créé la Légion d'honneur, Moi, j'ai fait Montmartre≫ Rodolphe Salis, *La chanson française*, Revue de la Bibliothèque nationale de France N⁰ 16, 2004, p.37 参照。

7) 作曲家でありオーケストラの指揮者でもあったシヴリーは，サリスやボトレルらと共にピアノ伴奏者として「シャ・ノワール」の巡業に同行した。タンシャンの後を受けて「シャ・ノワール」でピアニストを務めた後，没するまで「キャト＝ザール」でピアノ伴奏を務めた。彼はモンマルトルのあらゆるシャンソニエと音楽でコラボレーションを行った。多くのシャンソンやロマンスの作者でもあった彼は，腹違いの妹マチルドが 1870 年にヴェルレーヌと結婚したことで，詩人とも親しく付き合った。

8) 文学肌のタンシャンは「シャ・ノワール」で専属のピアニストを務めるとともに，店が発行する週刊紙の編集次長も務めた。ドビュッシーやサティとも親交のあった彼は，*Les Sérénités* という詩集も出版している。32 歳の若さで早世。

9) 「イドロパット・クラブ」や「シャ・ノワール」に出演した唯一の女性であったクリジンスカは，ポーランド出身の才能に富む作曲者でありピアニストであった。彼女はボードレールやヴェルレーヌやクロスの詩に付曲し自らピアノを弾いて歌った。彼女はまた詩人としても活躍し，ギュスタヴ・カーンと自由詩の先駆者としての地位を競ったことでも知られる。詩人としての彼女の革新性については，*Marie Krysinska (1857-1908), Innovations poétiques et combats littéraires, Des deux sexes et autres*, sous la direction de Adrianna M. Paliyenko, Gretchen Schultz et Seth Whidden, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 2010 を参照。彼女の出生年を *Les Poètes du Chat Noir*, Présentation et choix d'André Velter, nrf, Gallimard, 1996, p.494 では 1864 年としており，没年を Mariel Oberthür, *Le cabaret du Chat Noir à Montmartre (1881-1897)*, Slatkine, 2007, p.164 では 1904 年としているが，いずれも誤りである。 出版された詩集に，*Rythmes pittoresques* (1890), *L'Amour chemine* (1892), *Joies errantes* (1894), *Intermèdes* (1903)がある。

10) 「シャ・ノワール」で第2ピアニストを務めたサティとともに専属のピアニストを務めたフラジュロールは，1887年からアンリ・リヴィエールと協力して影絵劇のための音楽を手掛け，自らもその見事なバリトンの声を活かして劇中のシャンソンを歌った。彼はグドーから「イドロパットとシャ・ノワールのマエストロ」と評された。

11) 「長髪の禿頭」chauve chevelu とあだ名されたルゲは，モンマルトルのシャンソニエの先駆者と目される人物である。彼は「シャ・ノワール」開店当初から店に関わり，アリスティッド・ブリュアンやアルフォンス・アレらと交流し，ジャン＝バティスト・クレマンの歌詞に音楽を付けて歌ったり，モンマルトルの他の多くのキャバレーに出演するとともに，自らも〈l'Alouette〉(1899)，〈le cabaret du Grillon〉(1900)，〈les Noctambules〉(1904) といったキャバレーを開いた。彼はジュール・ジュイとも親友で，モーリス・ブケ Maurice Boukay のために多くの音楽を作曲し，それらの曲は *Chansons rouges*, Flammarion, 1896 に収録されている。

12) 音楽家であると同時に詩人であり魅力的な語り手でもあったロリナは，最初「イドロパット・クラブ」で，続いて「シャ・ノワール」で歌い人々を魅了した。彼はボードレールの影響を深く受けそれを極限にまで推し進めた。彼の不吉なブラックユーモアには狂気と不躾が混在していた。彼はそのボードレール流のサタニスムと民謡調のメロディーとで特異な位置を占めたシャンソニエであった。詩集に *Les Névroses* (1883), *L'Abîme* (1886), *Les Apparitions* (1896)があり，1972年に Minard から2巻の作品集に纏められ刊行されている。

13) Marie Oberthür, *Op.cit.*, p.158 参照。

14) Régis Miannay, *Maurice Rollinat, poète et musicien du fantastique*, Châteauroux, 1981 参照。なお，レジス・ミアネ氏はモーリス・ロリナ友の会の会長を務めている。

15) 仲間たちから「シャンソンで出来た男」la chanson faite homme と称されたほど驚くべき速さと自在さで膨大なシャンソンを書いたジュイは，筋金入りの共和主義者であり手ごわい論客であった。彼は「イドロパット・クラブ」で歌った後，当然のごとく「シャ・ノワール」でも歌うようになり，そこでジュール・ヴァレスと出会い，彼の発行する新聞 *Cri du Peuple* に協力し数多くの社会的・政治的・時事的シャンソンをそこに発表した。イヴェット・ギルベールをはじめカフェ・コンセールのスター歌手にも曲を提供し彼らに歌われた。彼はサリスと衝突した後「シャ・ノワール」を去り，〈le Concert des Décadents〉を開き自店や他のキャバレーで歌った。*Monologues humoristiques* と *Chansons de l'année* (1888)を出版する。

16) グドーに説得されて一般の聴衆の前で歌うようになったマック＝ナブは，その短い生涯を閉じるまで「シャ・ノワール」で人気を博したシャンソニエである。彼はヴァニエ書店から *Poèmes mobiles* (1885)と *Poèmes incongrus* (1887)の 2 つの詩集を上梓した。彼が「シャ・ノワール」で発表した歌は *Chansons du Chat Noir* (1890)と題して死後出版された。

17) 社会的・政治的シャンソンで生前モンマルトルのキャバレーで名をなしたフェルニであるが，現在は忘れ去られた存在となっている。1891 年に模倣芸人 Florent の紹介で不在中のサリスに代わって「シャ・ノワール」を任されていた Horace Valbel に紹介され，内気な彼は *Alibi*, *Missel explosible*, *Visite présidentielle* などの歌をはにかみながら歌った。するとすぐさま喝采を浴び店の専属歌手として雇われることになり，サリスと喧嘩別れして店を去ったジュール・ジュイの後継者の地位を獲得した。1894 年にはジュール・ジュイやポール・デルメらと「シャ・ノワール」に対抗して「シヤン・ノワール」Chien Noir というキャバレーを開いた。

18) ブレスは学校卒業後すぐにシャンソニエとしての活動を開始し，1891 年に故郷のマルセイユで Théodore Flaville とともにキャバレー「ラ・リュヌ・

ルース」la Lune Rousse を開く。1893 年に「シャ・ノワール」の巡業がマルセイユで行われた際発見され，翌年からパリの「シャ・ノワール」をはじめとするモンマルトルのキャバレーで主に社会的・時事的なシャンソンを歌った。

19) 1887 年にナルボンヌから法律を勉強するためパリに上京したイスパは，すぐに「シャ・ノワール」と契約を結び専属歌手となる。彼を一躍有名にしたのはモノローグ「孤独なミミズ」*Le Ver solitaire* である。その後「キャト＝ザール」，「ノクタンビュール」，「リュヌ・ルース」などに出演した。

20) 19 世紀末のフランス・パナマ運河会社の再建を巡る疑獄事件。ユダヤ系金融資本家による議員の買収が発覚し，第 3 共和政を深刻な危機に陥れた。

21) *Mémoire de la chanson, 1200 chansons du Moyen-Age à 1919*, réunies par Martin Pénet, Omnibus, 2001, p.816 参照。本書によるとこの歌は 1891 年にジャック・フェルニによって「シャ・ノワール」で歌われたとされている。

22) Horace Valbel, *Les chansonniers et les cabarets artistiques*, 1892, p.210. Marie Oberthür, *Op.cit.*, p.159 の引用に拠る。

23) *Ibid.*, p.160 の引用に拠る。

24) 1888 年に「シャ・ノワール」で Camille Baron の曲でマック＝ナブに歌われた。Martin Pénet, *Op.cit.*, p.789 に掲載。

25) これも 1888 年に「シャ・ノワール」で Camille Baron の曲でマック＝ナブが歌った。*Ibid.*, p.795 に掲載。

26) 1887 年に「シャ・ノワール」で Roland Kohr の曲でマック＝ナブが歌った。*Ibid.*, p.826 に掲載。

27) ユゴーがロリナに送った手紙には，≪Je lis vos beaux vers... Cher poète, je suis ému, je vous remercie.≫という讃辞が見られる。ロリナに関する項は，Marc Robine が *Les Poètes de la Chimère, Maurice Rollinat, La*

Mort Lui Ricane, Anthologie de la Chanson Française, EPM, 1996 の CD に付した解説に多くを負っている。

28) モーリス・ロリナ作詞作曲のこの歌は 1879 年に「イドロパット・クラブ」の会合で発表されたものである。Martin Pénet, *Op.cit.* p.665 に掲載。

29) 上記註 14)に挙げた CD のことで，ロリナ自作のシャンソンや，彼がボードレールの詩に付曲して歌った詩を集めた選集である。歌っているのは 4 人のメンバー（Carine Gargaud (soprane), Sandra Gargaud (alto), Serge Ceccaldi (ténor), Jean-Marc Babin (basse)）で構成された L'Orphéon Déconcertant をはじめ，Claude Antonini, Lucienne Deschamps, Gérard Cléry, François Boitard である。

30) 本名 Léon Fourneau。Xanrof というのは本名の Fourneau をラテン語の Fornax にしてそれを逆さ読みにした変名で，これは彼が弁護士をしていたことから，世間体を気にした両親に頼まれて付けた芸名である。彼はブリュアンの「ミルリトン」で歌った後，「シャ・ノワール」に出演するようになった当時のモンマルトルでは有名な歌謡詩人であった。彼のシャンソンは Yvette Guilbert や Horace Valbel らによっても取り上げられ歌われた。とりわけ彼が実際に辻馬車に轢かれた経験をもとに作られたという「辻馬車」*Le fiacre* は，ギルベールの巧みな歌唱によってその名を後世にまで留めている。彼の歌は，*Chansons à Madame* (1890), *Chansons sans gêne* (1890), *Chansons à rire* (1891), *Chansons ironiques* (1895)などの歌謡集に纏められ出版されている。

31) ブルターニュの Dinan に生まれたボトレルは，劇作やシャンソンを書きながら長い下積み生活を送るが，1895 年自作の「パンポルの女」を Emile Feautrier の音楽で〈Concert parisien〉で創唱した後，〈Chien Noir〉でも歌ったところ喝采を浴び一躍有名になる。この名曲をカフェ・コンセールのスーパースターFélix Mayol が自分のレパートリーに加え，1941 年に

世を去るまで舞台で歌い続けた。

32) Martin Pénet, *Op.cit.*, p.901 に掲載。

33) 子供の頃からその美しいボーイソプラノの声で注目されていたデルメは，1886 年から「シャ・ノワール」で歌うようになる。痩せ身のブロンドでガラスの義眼を隠すために鼻眼鏡をつけていた彼は，その繊細なロマンスで一躍脚光を浴びる存在となる。

34) ブケは本名を Maurice Couyba といい，1896 年に代議士に当選するまで昼間はリセ「アラゴ」の教授をし，夜は「シャ・ノワール」で歌った。彼は 1907 年に SACEM の会長となり，1911 年には商業大臣に任命された。ヴェルレーヌに「ピエール・デュポンの精神的後継者」と評され，急進的左派の立場から「赤い太陽」*Le Soleil rouge* などの歌を労働者サークルで歌った。彼のこうした急進的な社会的・政治的な歌詞はマルセル・ルゲによって曲付けされ歌われ，愛をテーマにした歌詞はデルメによって付曲され歌われた。

35) Martin Pénet, *Op.cit.*, p.861 に掲載。

36) Mariel Oberthür, *Op.cit.*, p.164 参照。

37) *Ibid.*, p.164 の引用に拠る。

38) ジュイに関する項は，*Jules Jouy (1855-1897), Le ≪poète chourineur≫*, présentation et choix de textes, Patrick Biau, Sénouillac, 1997 に多くを負っている。

39) ドネは実業家の息子で親からは将来技師になることを嘱望されていたが，「シャ・ノワール」で詩人として成功し，リヴィエールの影絵劇の台本などを手掛け劇作家としても活躍した。彼の詩は滑稽と悲壮との間を揺れ動き，悲嘆と快活のコントラストが見受けられる。最後はアカデミー・フランセーズ会員となる。彼が「シャ・ノワール」の思い出と自作の詩を纏めた『シャ・ノワールを巡って』は，当時の店の様子を知る貴重な証言とな

っている。1926年にグラッセ社から初版が刊行されているが，現在入手可能なのは，Mauice Donnay, *Autour du Chat Noir*, Les Cahiers Rouge, Grasset, 1996である。

40) ケンブリッジ大学で勉強した後，ムズィーはモンマルトルのキャバレーでデビューする。シャンソニエとして一定の成功を収めるが，生活は苦しく，収入を得るために彼は東部鉄道会社に入社する。出版された彼の歌謡集に，*Chansons d'hier et d'aujourd'hui* (1889)，*Chansons modernes* (1891)がある。1912年にSACEMの会長となる。

本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金による研究課題「文芸キャバレーにおける文学とシャンソンの影響関係」(平成25～27年度基盤C，研究代表者：吉田正明，研究分担者：三木原浩史）の研究成果の一部として発表したものである。

（よしだ・まさあき：信州大学人文学部教授，研究テーマ：19世紀フランス詩・シャンソン文化史）